

西南学院とスポーツ

— 過去・現在・未来 —

出席者：中馬 充子氏（大学人間科学部教授）
桐明 正氏（前大学体育 OB・OG 会長）
坂井 啓氏（大学学生部事務部長）
武井 俊詳氏（大学副学長）
和佐野健吾氏（小学校長、前中学校・高等学校長）
山崎 勇視氏（大学名誉教授） 〈ABC 順〉

司 会：小林 洋一（百年史編纂準備委員長・大学神学部教授）



司会（小林）：田尻グラウンド（西南学院大学田尻グリーンフィールド）の全面使用が可能になり、本日午前中、全面オープンセレモニーが盛大に開かれました。この規模の総合運動場を持つことは、長い間の願いでしたし、西南の歴史にとって画期的なことです。今後の西南学院のスポーツおよび体育教

育・研究に大きな影響を及ぼすのではないかと思います。

この機会に『西南学院史紀要』では、スポーツをテーマとする特集を組み、この座談会を企画いたしました。これまでスポーツ、体育教育にかかわってこられた皆さんに、西南学院におけるスポーツ、体育教育・研究に関する、

ご意見、ご希望、夢を忌憚なく語っていただきたいと思います。まず田尻グリーンフィールド全面オープンセレモニーのご感想、これまでのスポーツおよび体育教育とのかかわりについてお話しください。それでは、中馬先生からお願いします。

中馬：私は学院に着任して15年とまだ日が浅く、しかも運動部とは直接かかわってきませんでしたので、情報が乏しいのですが、「女性とスポーツという視点でコメントを」と依頼され、それならいくらか意味のある発言もできるかもしれないと思い、参加させていただきました。

今日のセレモニーのイベント¹⁾に参加した日本の未来を担う子どもたちは、非常に元気で、挨拶もしっかりできていました。私は、そういう子どもたちがより良き市民として育っていく場の提供という意味で、田尻グラウンドは非常に有益なフィールドではないかという感想を持ちました。また、学長のご挨拶は「頭（知識）、心、体という三本柱の教育、西南のオリジナリティーとしての教育を求めたい、そういう意味で、この田尻グリーンフィールドを有効活用したい」という真摯なお話でした。

この座談会は、人間科学部に所属し、スポーツ実習やスポーツ理論、児童教育学科の講義を持っている私にとって、スポーツを通して何を提供できるのかを考えるための良い機会になるだろうと思っています。最終的には大学の教育理念と一致しますが、より良き市民を輩出するためになすべきことを、

先生方のお話から学びたいと願っております。

司会：ありがとうございます。それでは、桐明さん。

桐明：私が西南で学んだのは、1943年（昭和18年）から53年までの10年間です。終戦の年である1945年までは旧制中学部の4年生と5年生、その後は新制高等学校、新制大学という異例な経験をしました。入学した時は軍国主義教育でしたが、戦後は新たな西南になったような気がします。

大学に進んだ1949年当時は、松延陽一、土屋定、山崎剛という体育の先生がおられ、全国的に強かった野球、ラグビー、バスケットボールが西南のスポーツを代表していました。しかし、松延先生は「クラブスポーツも大事だが、全員がもっとスポーツをやらなければいけない」と、学内スポーツ大会²⁾を計画されました。また、体育会の組織もできました。私自身は、バスケットボールからハンドボールに移り、高校当時、国民体育大会等々に出て、ある程度の成績を挙げました。その後、大学でハンドボール部を創設し、今につながっています。今は九州学生ハンドボール連盟の副会長をさせていただいております。

司会：ありがとうございます。次に坂井さん、お願いします。

坂井：私がこの座談会に呼ばれたのは、学生の課外活動等を管轄する学生部の事務責任者であり、体育OB・OG会の副会長を仰せつかっているからだろうと思っています。私は商学部経営学科出身ですが、卒業したてのころは「体

1 記念式典・昼餐会の後、福岡ソフトバンクホークスOB選手による野球教室および少年野球チーム対抗記念試合が行われた。

2 IM大会（Inter-mural）：校内体育大会のこと。

育学部武道学科出身です」と言っただけで済ませようとした（笑）。今は恥ずかしくて、そんなことは言えませんが、学生時代は剣道に打ち込んでいました。

私が大学に入学したのは37年前ですが、既に干隈グラウンドや体育館がありました。その前には体育館もない時代があったようで、先輩方に比べると恵まれた環境でスポーツに励んだわけですが、今回完成した田尻グリーンフィールドは、中同窓会長³がおっしゃったように日本一ではないかと思っています。きちんと調べたわけではありませんが、これだけの施設の総合グラウンドを持っている大学は、まずないのではないのでしょうか。このグラウンドを生かして、西南学院大学の学生を社会に貢献できる人材に育てていく一助とすることが、非常に重要だろうと思います。

本学の規程としては非常に珍しいことですが、田尻グリーンフィールドの管理規程には、目的の1つに「地域社会への積極的な貢献を目的とする」とうたっています。そういう意味では、学院の学生・生徒たちの心身を鍛える場であると同時に、大学が地域に貢献し、地域の中で認められるための一つの器になり得るのではないかという期待を持って、今日のセレモニーに参加しました。

司会：ありがとうございます。それでは、武井先生。

武井：田尻グリーンフィールドには、いろいろな感慨がございますが、当初は私も移転反対の立場でした。田尻にグラウンドを持つという話があった当初、私は学生部長で、多くのクラブは遠く

へ行くのを嫌がっていました。また、「レンコン畑を埋めてもせいぜい砂地しかできないから人工芝を張ってほしい」という話もありましたが、予算的にはとても無理でした。

幸いなことに、九州大学伊都キャンパスのために削った山の土を譲り受けて、レンコン畑を埋め立てることになりました。土の購入と運搬の予算が削減できたおかげで、去年できた西ゾーンのラグビー場、アメリカンフットボール場、サッカー場にそれぞれの目的に応じた人工芝を張ることができましたし、陸上競技の全天候型トラックもできました。完成したフィールドに踏み込んだ時、こんなに立派なものと、すごい感動を覚えましたし、選手たちも「遠い」と言うのではなく、ここに来て練習したいと思うのではないかと感じました。今回できた東ゾーンには、素晴らしい野球場、アーチェリー場、ソフトボール場もあります。立派な施設ができました。少なくともクラブの学生たちは喜んで練習に来ております。

ただ、体育会の学生だけでなく、全学生が何らかの形で使えるようにしなければならぬと思います。今日、田尻グリーンフィールド全面オープンセレモニーでのあいさつのなかで学長がおっしゃったように、体を使う部分を強化していかなければなりません。大綱化により、かなりの学部・学科が体育を必修から外した結果、その一因かと思うのですが、学生の体力低下が起きました。体力低下は積極性の低下にもつながるだろうと思います。ですから、体育実習を正課に取り入れてい

3 大学同窓会会長の中脩治郎氏は2005年6月から現職

く方向を打ち出すべきではないかなと思っています。

司会：ありがとうございます。次に和佐野先生、お願いします。

和佐野：私は1959年に西南学院中学に入學しました。そのころからスポーツに非常に興味があり、中学時代は野球部、高校時代は体操部に属していました。それから東京の大学に入りましたが、卒業後は保健体育の教員として西南学院高校に就職し、以来ずっとハンドボール部を指導してきました。そういう経歴で、少しは西南のスポーツや体育の移り変わりを見てきたと思っています。



和佐野 健吾氏

私たちが中学校のころは施設のにも貧しい時期で、体育館を持たず、福岡県の古い武道館を移設した体育館が高校にあるだけで、大学生も高校の体育館やグラウンドで練習をしていました。そのように体育事情が非常に悪い時期でしたが、今と比べれば、西南学院全体の競技力のレベル、特に大学のレベルは高かったと思います。とりわけラグビーなどは、中学時代にやりたいなと思っていたぐらい強かったですね。

そういう意味では、素晴らしい施設ができましたが、果たして十分活さ

れるのだろうかという心配もあります。が、スポーツを盛んにするきっかけとなれば幸いですし、本当に素晴らしい施設が与えられたことに感謝しています。

司会：最後になりますが、山崎先生、お願いします。

山崎：今日、グラウンドを見学し、シンブルなグラウンドだなという印象を受けましたね。私は干隈グラウンドに三十数年間通ったこともあって、グラウンドと別れを告げるセレモニーであいさつした時は涙が出ました。新しいグラウンドの良し悪しは、20年後、30年後に出るだろうと思っています。

私は1957年に西南学院大学に赴任し、キリスト教とスポーツを理論的に結び付けた体育概論を教えてきました。

「勝利至上主義ではなく、フェアプレイやスポーツマンシップが重視されているのは、キリスト教の影響ではないか」と講義した思い出があります。「スポーツの目的は、勝つことばかりではない。勝っても、相手を思いやる精神が大事だ。負けても、くよくよすることはない。それは、次のチャンスに向かって努力しろというシグナルなんだ」、「ラグビーのスピリットは、グラウンドマナーとノーサイドの精神だ。それをスポーツだけではなく、日常生活やキャンパスの中で具現化することが、キリスト教に通じる人格の形成に役割を果たす」と、毎年おうむ返しのように教えておりました。

1970年ごろ国際交流推進委員会ができ、私も委員に選ばれました。委員長のフィルダー先生から「留学生に日本の武道を教えてください。武道は英語で何といいますか」といきなり聞かれ、「武道は戦争みたいなものでは

ら、『マーシャルスポーツ』でいかがですか」と答えると、「いや、それは学校教育にふさわしくありませんよ」と言われました。現在使われている「ジャパニーズ・トラディショナル・スポーツ」という呼び名は、フィルダー先生が命名されたものです。

司会：ありがとうございます。干隈校地のお別れ会で山崎先生が感動的なスピーチをされたことを、懐かしく思い起こしています。

◇スポーツと体育

司会：次に、学校教育におけるスポーツおよび体育についてお聞きしたいと思います。既に山崎先生がミッションスクールとスポーツの関係を言ってくださいました。山崎先生のお話に加えることがあれば、和佐野先生にお願いします。

和佐野：中学校も高等学校も、いまだに「体育」という名前で授業を行っています。内容的には随分スポーツ的な分野が広がっていますが、中学校では武道という領域が必修となり、剣道、柔道、相撲も含めて教科の中に入ってきます。ですから、スポーツというより、まだまだ体育領域が占めているのではないかと思います。ただ、高等学校では、前回のカリキュラム改定の中で選択制が取り入れられ、生徒たちの選択によるスポーツを中心とした授業、非常に大学的な授業が増えてきました。その分、体操や陸上競技などの分野が減っています。そういう訳で、体育の内容も随分変わってきたかなと思います。

すね。

司会：大学を代表して武井先生、お願いします。

武井：最初の自己紹介でも触れたように、ほとんどの学部・学科がスポーツの実技を選択制にしたのは大きな失敗だったと、私は思っております。英語専攻のゼミの学生が、いろんなスポーツの対抗試合をやっています。そうすると、みんなが協力し合い、心を合わせて競



武井 俊詳氏

い合う経験をする中で、ゼミ間の学生同士のつながりも深くなります。体育の授業で球技をやれば、競い合うことを通じて互いの個性が分かりますし、力を合わせて勝つことの素晴らしさ、負けることの悔しさなど、人間が生きていく上でのいろんなことを学べるのではないかという気がするのです。ですから、大学の教育においても、体育の授業は欠かせないと思っています。一度なくなったものを復活させるには難しい点もありますが、学長や山崎先生がおっしゃったように、西南のスポーツのあるべき姿にまで踏み込んだ形で位置付けることにより、生きた体

4 レノックス・フィルダー (Lennox Gerald Fielder, 1926-2004) : 1956年から78年まで大学経済学部在籍し、教授として主に外国経済事情を教えた。

育授業になっていくのではないかと
思っています。

司会：ありがとうございます。

坂井：一つ確認ですが、スポーツと体育の
違いを明確にしておいた方が、次の
話に進みやすいと思います。お話を
伺っていると、正課授業における体育
を「体育」、スポーツ全般を「スポー
ツ」と使い分けをされているように感
じますが、そういう認識でいいので
しょうか。

司会：実は、大学は正課授業を「体育」
から「スポーツ」に名称変更したのだ
ですが、その違いを正課と課外と考
えておられる方が多くいらっしゃい
ますので、その辺のところを後で取
り上げたいと思っています。

桐明：それに関連して、体育が必修でな
くなったのはいつからですか。

山崎：1991年からです。

桐明：何か理由があるのですか。

司会：それではせっかく質問が出まし
たので、その話題に入りましょうか。
山崎先生お願いします。

山崎：1991年に大学設置基準が大綱化
されました。その中で、一般教養
教育の単位数が減少するとともに、
多くの大学で保健体育が選択化され
ました。いわゆる体育実技科目が必
修から選択へと移行され、それに
伴い、それまでの「体育実技」と呼
称されていた授業科目が「生涯ス
ポーツ」「スポーツ実習」「スポー
ツ実技」などへと変更されました。

私見ではありますが、授業の選択化
により、学生に選ばれやすい、学生
が好みそうな科目名が設けられるよ
うになったのではないのでしょうか。
近年、大学生の体力は低下傾向にあ
るといわれています。ランニングな
ど、基礎体

力の向上を目的とした運動を中心
に行わせると、学生は次年度から選
択しなくなる可能性が高いので、ス
ポーツ化の傾向が進んだと考えてい
ます。その結果、本来体育実技を選
択しなければならない、運動不足、
低体力の学生が受講しなくなり、
運動好きで、比較的体力のある学
生だけが受講するようになってき
ているんじゃないかと思えます。

選択制や授業評価の導入により、あ
る程度は学生のニーズに応じた科目
も必要になってきたわけですが、体
育の目的である身体的、精神的、
社会的な健康づくりの機会が失われ
ないかという心配があります。昔か
ら知育、徳育体育、といわれています
が、体育だけが知育と徳育を含んだ
教育を行えると考えています。高
等学校時代に運動部に所属した者
の約3分の2が、大学では非スポー
ツ的、非運動的なライフスタイル
へと変わっているともいわれてお
ります。



これらの背景によって、体育実技
必修化の検討が必要になってきたと
思われるわけです。全国大学体育連
合の調査によれば、実技系科目を必
修科目にしている大学・短大は、
2003年度が65

%であったのが、現在は76%に増えています。全国に複数のキャンパスを有するある大学は、2010年度から体育関連科目を必修にするようです。近年、関東や関西の大学は現在、競って体育・スポーツ系の学部や学科を申請しています。ですから、全国的に体育教育が見直されているのです。

司会：山崎先生、貴重なインフォメーションとご意見をありがとうございました。ということで、正課か課外活動かによって、名前を「スポーツ」「体育」と分けられなくなっているわけですね。

中馬：「体育」という名称について、若干補足をさせていただいてよろしいでしょうか。戦前の軍事教練の一環としての体錬科が、戦後は体育として学校教育の中に位置付けられましたが、西ドイツ黄金計画や、J.F.ケネディによる「ソフトアメリカン」などの影響を受け、1961年に我国でもスポーツ振興法が公布されました。ここでは、「スポーツ」とは運動競技および身体活動であって、心身の健全な発達を図るためになされるものと定義付けられています。もはや、かつての「体育」という名称だけでは捉えきれなくなったようです。戦後60年あまりを経た今では、学校において身体運動やスポーツを通して心と体を教育することが「体育」と理解されているようです。

大学体育の取り扱いは、大綱化により各大学の自由裁量に任せるという動きの中で、西南の体育は必修科目から外されるに至りました。ただし、これはスポーツや保健体育が必要ないからというわけではなく、大学の運営・教育理念に基づく優先順位によって選択科目になったという事情に過ぎません。

したがって、大学学部・学科によっては、今なお必修科目として位置付けている場合もあります。

いま大学が競ってスポーツ関連学部を設置しているのは、スポーツに颯爽としたプラスイメージがあり、それを経営戦略の一つとして位置付ようとしているからです。どちらかといえば「体育」は古いもの、「スポーツ」が現代的で、洗練されたものというニュアンスがありますので、近年は「大学スポーツ」という名称を意図的に使うようになってきております。

◇強かった運動部

司会：中馬先生、専門的な観点から分かりやすく説明していただき、ありがとうございました。次にこの座談会のテーマが「西南学院とスポーツー過去・現在・未来ー」ですので、過去についても触れたいと思います。

今年から始まった「西南学院史講義」で武井先生が、スポーツクラブの全国的な活躍を取り上げていらっしゃいます。かつては何回も全国優勝するようなスポーツクラブが多かったのですが、その理由をお聞きしたいと思います。ハンドボールに関しては、強い西南学院高校からの入学者のおかげだったと聞きますが、それは本当なのでしょうか（笑）。

桐明：否定はできませんね。否定しない理由の一つとして、大学への推薦制度によってハンドボールの優秀なプレーヤーがたくさん入り、必然的に強くなったことがあります。もう一つはちょっと言いにくいことですが（笑）、大学の数が少なかったという時代的な背景もあるんですね。例えばハンド

ボールの場合、九州大会の創設から3連覇しましたが、「何校参加したのか」と聞かれると、答えにくいわけですよ（笑）。当時の福岡商大（現在の福岡大）、西南学院、熊本大学、鹿児島大学の4校だけでした。第1回大会たるや、熊本も鹿児島も旅費の都合などで来られず、いきなり福岡商大との決勝戦でした。



西南高にもラグビー部はありましたが、大学へ行って活躍するほどの技量はありませんでした。私の記憶によれば、当時は修猷館であり、福岡高等学校でした。それらの学校の優秀なプレーヤーが、戦後の事情のためか、東京の早稲田や明治へ行かず、西南学院大学に入ってきました。

司会：私は何となく今の大学の数をイメージしていましたが、桐明さんから歴史の真実を教えられました（笑）。

武井：輝かしい戦績の背景には、大学そのものの数が少なかったこともありますが、ラグビーに関していえば、1950、51、52、58、59、60年度にも全国優勝しています。その時代になると、大学の数もかなり増えていましたので、やはりすごかったと思いますね。

山崎：その強かったラグビー部が、なぜ

弱くなったのかという問題があります。私は1961年に1年間在外研究で留学し、帰国してから指導を続けることが困難な時期がありました。指導者に対する経済的なケアの面で、当時の西南はなかなか理解を示してくれなかったんです。グラウンドでの教育だけでなく、学生にはアフターケアが要ります。それによる個人負担が増え、だんだん熱が冷めて遠ざかっていったという個人的な理由がありました。

桐明：山崎先生のお話の通りだと思います。高校はもちろんですが、大学といえども、やっぱり指導者が大事です。大学には部長先生がいらっしゃいますが、名前だけという状況ですね（笑）。一時期、ボランティア・コーチングスタッフの表彰などをされましたが、そういう強化策が必要ではないかと思えます。もちろん経済的なケアも必要ですが、例えばインカレの結団式で指導者を紹介したりして、全学生に知らしめてほしいと申し上げたことがあります。

和佐野：当時も今も西南は、文系の私立大学としては、本当にみんなが行きたい大学ですよ。そういう意味で、選択肢の中のトップだったんですね。ですから、優秀な選手が多数入っていたと思いますが、今は西南学院高校、修猷館高校、福岡高校、筑紫丘高校からの入学者は減っているのでしょうか。ラグビーなどが弱くなった原因の一つは、そこにあるだろうと思います。もともと西南はハイカラな大学で、他大学がやっている野球などは違う、ヨット、ラグビー、バスケットといった競技がもてはやされる風土があったように思いますが、今はなかなか勝てません。その原因の一つは、

やっぱり高校から優秀な選手が来なくなってきていることですね。

西南高の体育については、池辺先生⁵が来られた1952年ごろから「西南に体操あり」と称賛され、体操の授業は日本一だろうと言われるほど高度な授業が行われました。いまだにその伝統が保たれています。徒手体操の創作と発表の伝統は、日本の学校では例を見ないだろうと思いますし、福岡県の県民体操も、西南高でつくられました。体操部も、二十数年にわたる全国大会出場という歴史を持っています。指導者の問題は大きいと思いますね。

桐明：ちなみに和佐野先生は、西南高の体操の選手から日本体育大学の体操部で活躍し、母校に帰って来られて、なぜかハンドボールの指導に携わられ、大きな成果を挙げられています。やっぱり指導者の熱意が、学生たちの心に響くのではないのでしょうか。ですから、何としても優秀な指導者が欲しいなと思います。

坂井：指導者の重要性は、私も否定しません。非常に重要だと思います。ただ、卵が先か鶏が先かという議論に似ていると思いますが、やはり指導者が指導する対象が非常に大事です。私は剣道の世界しか知りませんが、指導者の影響を最も受けるのが小・中学生で、逆に最も受けないのが大学生で、そこには指導者の力だけではないかんとし難い部分があります。ですから、いい指導者、いい運動設備、スポーツに意欲を持って真摯に取り組む学生がそろっていることが大事だと思います。

体育OB・OG会の名簿で出身校を見ると、昔は修猷、福高、筑紫丘、西

南高が多数おられましたが、最近は非常に減っています。それらの高校の出身者が多ければいいという意味ではありませんが、当時は意識の高い学生がたくさんいたのかなという感じがしますね。今の学生さんも優秀だと思いますが、スポーツに対する考え方が少し変わってきている点が心配です。そういう点では、先ほど武井先生がおっしゃったように、せめて1、2年生までは体育を必修化してほしいと思っています。精神力も大事ですが、体力も大事です。高校までの体育の授業の現状はよく知りませんが、大学でもある程度カバーしないといけない時代になっているのではないかと思います。

もう一つは、入試制度です。体育だけでなく、大学の勉強についていける人たち、勉強にも課外活動にも熱心に取り組む人たちをつかまえていくことが、非常に重要ではないかという気がします。それでは、そういう人たちに入学してもらういい方法があるか、となると難しいですね(笑)。けれども、検討の余地は残されていると思います。

◇女性とスポーツ

司会：過去の話をしていたつもりが、既に現在の話に入っております。中・高、大学を含めて女性が多くなっていますので、女性のスポーツ教育、体育教育で特に留意しなければならない点を中馬先生、和佐野先生にお願いします。その後、既に出ている指導者の話、未来の話に移っていききたいと思います。

中馬：私が西南に着任した15年前は、6対4ぐらいで、男子が多い時代でした

5 池辺敬光(1922-1996)：1952年から87年まで高校の教員として在籍し、体育を教える。

が、今ではこの割合は逆転しています。日本のスポーツには、アメリカの影響が多く見受けられます。アメリカでは1950年代から60年代にかけて、人種差別の撤廃を求める公民権運動が盛んになりました。そして、いわゆるウーマンリブがブームとなる中で、通称「タイトルナイン」という法律が、1972年6月に連邦議会を通過し、ニクソン大統領により施行されました。そのタイトルナインの中には「合衆国に住むいかなる人も、単に性が違うという理由のみで、政府から財政的援助を受けている教育プログラムや活動への参加を拒否されたり、利益を否定されたり、あるいは差別にさらされることはない」と書かれています。それまではスポーツの場面でも男女差別がありましたが、タイトルナイン以降は、あらゆる場面における男女の機会均等、特にスポーツにおける平等の機会を与えることがブームになりました。その影響が日本にも及び、スポーツの場面での女性の活躍ぶりがクローズアップされるようになりました。



中馬 充子氏

東京国際女子マラソンで日本人として初めて優勝した佐々木七恵さんは、私の大学時代の友人で、不幸にして

2009年6月に亡くなりましたが、マスメディアの報道もあり、男女雇用機会均等法の成立やジェンダー問題も関係して、ようやく彼女のケースのような事例が増え、女子スポーツが市民権を得たように思います。ただし、女子はまだ原則として相撲の土俵には上がりません。また高校野球の世界では、ようやく「記録係」と称してベンチに入れるようになったにすぎません。大学野球の世界では、一回だけですが、東大と明大の試合で女子のピッチャーが投げ合いました。女子もだんだんとスポーツ界で市民権を得てきておりますが、日本独自の国民的な思想によるデメリットも残されているのではないかと思います。

先ほど坂井さんもおっしゃいましたが、大学の経営側のバックアップが重要だと思います。女性がスポーツをする場合、いろいろな意味でデリケートな部分もありますし、女子学生の占める割合が今後ますます高くなるのであれば、少し視点を変えて、女性がスポーツをする可能性を高めるような方向性を見いだしていただきたいと思います。また、女性指導者が極めて少なく、男性指導者がほとんどを占めるという従来のスタイルも少し変えることが検討されても良いかもしれません。

司会：ありがとうございます。和佐野先生、女子のスポーツ教育をどう進められますか。

和佐野：私個人の考えになるかもしれませんが、先ほどアメリカにおける女性スポーツ支援に関するお話がありました。ご存じのように、アメリカの4大スポーツはみんな男性中心のスポーツです。アメリカの大学の場合、スポーツのチケットの売り上げが、アメリカ

ンフットボールの資金になり、野球の資金になっていますが、その資金も女性に渡せという法律ができたわけです。

ただ、私が考えるのは、果たして18歳を超えた女性が競技スポーツに没頭できるのかということです。西南大の女子学生はスポーツを娯楽でやるのか、それとも競技スポーツをやるのか、また、競技スポーツが大学生に必要なのかと考えるんですね。中学、高校までは女子も競技スポーツに十分に耐えますが、西南大の女子学生たちが競技スポーツを望んでいるのでしょうか。そう考えてみれば、発展性はないだろうと思います。しかも、一部の大学では推薦制で入った学生たちが競技スポーツをやっていますから、戦っても圧倒的な力の差があるわけです。

大学のラクロス部には、西南高で女子ハンドボールをやっていた女子生徒が結構入部しています。そういう他競

技の選手によって、今のラクロス部は守られています。そのような選手が入部せず、戦力が落ちてしまうと、次も入らなくなります。やはり勝たないと、スポーツは楽しくないですから。西南では女子の競技スポーツは発展しないだろうと、私は考えています。それが証拠に、愛好会と称する、戦いのない、楽しいクラブがいっぱいありますし、愛好会でさえ規律が厳しいからと、さらに緩やかなサークルができています。組織としてスポーツを楽しむ時代ではなくてきているのではないのでしょうか。西南高の生徒たちも、高校時代までと割り切って、競技スポーツをやっています。大学で活躍できる能力のない生徒は「スポーツは高校までで十分です。私は医者を目指します」などと言います。別の目的を持っており、競技スポーツは目的でも目標でもないのです。中学・高校時代のスポーツは、



▲13.5㎡の広大なエリアに、7つの競技場、多目的広場、宿泊施設をもつ西日本最大級の大学総合グラウンドである田尻グリーンフィールド

男子だけでなく女子生徒にとっても、あくまでも体を鍛え、楽しむためのものではないでしょうか。

高校に女子ハンドボール部ができた時の話ですが、1994年に男女共学になるとすぐ、8人の女子生徒がハンドボール部のマネージャーになりたいと言ってきたんです。「君たち、洗濯するぐらいだったら、自分たちでプレイしたらどうだ。練習のプログラムを組んだり、本当にマネジメントするのであれば価値があるが、汚れ物を洗ったり、水をくんだりしても、プレイするのに比べたら人生のプラスにはならない。8人もいるんだから、自分たちでクラブを作りなさい」と勧めました。そのメンバーでは絶対勝てない。最初は種まきでいいと思いましたが、10年ぐらい経つと、常に福岡県のベスト4に入り、優勝を争うようなチームになりました。やはり中学から高校と一貫したシステムでチームをつくらないと、なかなか勝てないですね。中学で育てて、高校で花が開きます。

山崎：和佐野先生のお話に関連しますが、私は女子ラグロス部の創設時の部長でした。福岡大学のグラウンドでの試合を応援しながら、はっと気が付きました。ゲーム運びを見て、西南大にきた女子学生と福岡大とは、性格がこんなに違うのかと思ったんですね。西南大の女子学生はおとなしいというか、女性らしいというか、何となく覇気がない。福岡大の女子学生には闘争心があるんですよ。そういう違いを見ましたね。

司会：和佐野先生が言われたスポーツにおける遊技性と競技性については、なかなか深い問題があって、簡単にどうこう言えませんが、中高一貫の中で競技性を高めるシステムは考える必要があると思いました。

中馬：現代スポーツの本質を遡ると、そもそもスポーツとは、結果を出すことではなく、スポーツすること、プレイすること、それ自体が目的であると解釈されています。つまり、若干の立場は異なるものの、ホイジンガ⁶やカイヨワ⁷は、「遊び=プレイ」それ自体に高い価値を認め、どんな物質的利害関係とも結びつかず、それから何らの利得ももたらされる必要性はないと述べました。ただし、時代の流れとともに、やはり意味付けを求めるようになってきました。大学スポーツの場合も、経営戦略の一つとして広く社会にアピールするようになってきたようです。

和佐野先生がおっしゃったように、本学にも体育会と愛好会があります。体育会には勝つという要素が重視され、サークルである同好会・愛好会には楽しむという要素が重視されます。クラブは活動を通して人を育てるという指摘もあります。「アソシエーション」という言葉がありますが、利益を得ること以外の目的のために人々が集まっている団体を指します。「スポーツとは民主主義の学校だ。ルールに従って組織を動かしたり、メンバーの意見をよく聞いて公平な決定を下したりする、民主主義を育てる場」と位置付けられるようになりました。

ところで女子マネージャー論争とい

6 ヨハン・ホイジンガ (Johan Huizinga, 1872-1945) : オランダの歴史学者。

7 ロジェ・カイヨワ (Roger Caillois, 1913-1978) : フランスの文芸批評家、社会学者、哲学者。

うものがあります。先生方は試合のとき、マネージャーが差し出したレモンの砂糖漬けを口に含まれたことはありませんか。レモンの砂糖漬けは、男子マネージャーが作ってもダメ、お母さんが作ってもダメ、女子マネージャーが作るから価値が高い、という話があります（笑）。スポーツ選手を支えている、そういう一翼を自分たちが担っているという偽らざる本音が、女子マネージャーたちにはあるようです。ですから、いろいろと雑務は多いのですが、それなりに生きがいを感じている女子マネージャーが多いというデータもあります。女子マネージャー増加の背景にはメディアによる多大な影響があるようですが、マネージャーを志願する女の子たちは、「タッチ」というアニメに出てくる南ちゃんをモデルとし、ああいう世界をイメージしているようです。ですから、マネージャーの方が選手より多いチームも結構、日本全国を見渡すと、あるようですね（笑）。

◇指導者について

司会：それでは、一番ホットな話題になっている指導者の問題に移ります。中・高も同じだと思いますが、大学には実に多くのスポーツクラブがあり、先生方が部長として指導しておられます。同時にOB・OGや職員の方々が、ボランティアの指導者として、いくつかのクラブにかかわっておられます。他の大学はどうしているかわかりませんが、OB・OGや職員のボランティアを、教育に対する貢献としてもっと評価すること、職員の監督やコーチとしての働きを、職場での働きと同じように評価することも考えられないわけ

ではありません。専任職員の採用も考えていかなければならないと思います。坂井さん、その辺のお話を聞かせてください。

坂井：職員の評価という問題に絞ってお話します。私自身もそうですが、彼らが西南に雇われたのは、クラブの監督やコーチをするためではなく、事務局の職員として力を発揮し、事務局を盛り上げ、ひいては西南学院大学を盛り上げ、西南学院全体を盛り上げていくという働きを期待されていたことです。ですから、一生懸命スポーツの指導をやっているという、それは評価の対象ではないのです。逆にやり過ぎて、本業がおろそかになれば、それはマイナスになります。我々の人事考課制度は、ある意味、非常にシビアなもので、そのシステム上、彼らをクラブの指導者として評価することはあり得ないのです。ですから、今後その辺に力を入れるとすれば、人事考課制度や採用形態を考えなければなりません。



他の大学には、スポーツ指導のための職員を事務局に採用する制度を持っているところもあります。しかし、今の西南には、そんな余裕はありません。今後できるかどうかについては、私が

ここで結論付けることはできませんが、現状ではなかなか厳しいですね。

ただ、ある程度の資金的な援助はやっています。例えばコーチとして登録されている人が試合に同行する場合、学院の出張旅費規程に準じた形で、日当も含めて手当てをしています。ですから、むしろ学外の指導者に対する支援を強化していくべきだと、私は考えています。

山崎：結局、指導者、施設、経済的支援と学生の全てがすべてそろわなければ、なかなか強化にはつながらないと思います。私は現役時代、シーズン中の日曜日はほとんど、グラウンドに指導に行ったり、遠征にも行きましたが、大学の規程で定められたもの以外の支援は得られませんでした。

もう一つの問題は、監督やコーチの選び方です。協会や連盟に監督、コーチの名前を提出しないと試合ができない決まりになっています。ですから、そのための名前だけで、1年に1、2回しかグラウンドに出てこない指導者もいらっしやいます。また、監督やコーチは学生やOBが選んで、大学の承認も、部長の承認も得ていません。ただ報告するだけですから、承認制などを検討するべきでしょう。

1960年ごろには、学生部の中に課外活動を担当する部署がありました。まずそういう組織を立ち上げて、強化することが大事です。体育館でも毎日300人を越える学生が課外活動をしています。スポーツの強化、大学の運営といった大きな問題を抱えているので難しい面もあるのですが、学生たちが安心して円滑に課外活動を行うためには、組織づくりとその強化が重要でしょう。

司会：今の山崎先生のご意見は、OB・OGのボランティアの人たちに対する資金的な手当ての必要性、もう一つは、スポーツおよび体育を強化するために、総合的に統合する部署が必要というお話でした。

坂井：それは非常に難しい問題ですね。西南を見ていると、確かにスポーツに対する力の入れ方が弱いとは思いますが、強化策の一つとして、いきなりそういう部署を作ろうというふうにはならないのかなと感じます。大学の姿勢をスポーツ強化の方向に持っていくために、どこかで再検討しようという道筋ができれば、指導者への支援や関係諸制度の問題も含めて、全体で考えようという機運が高まっていくと思いますが、現状を見れば、そういう状況は生まれにくい雰囲気だと思います。

桐明：田尻グリーンフィールドができた経緯も踏まえて、今おっしゃったようなことを進めていく時期に来ているのではないかと思います。なぜグリーンフィールドが要るのかという問題もあるかと思いますが、完成したことについては賛成ですし、将来の夢に向かって進んでいくためには、先ほどの話の組織は必要だろうと思います。短期的な組織にするのか、長期的な組織にするのかは、これからの検討事項でしょう。

司会：そうですね。私は「部署」と言いましたが、それよりも委員会の方がいいと思います。各部署から委員を選び、総体的に西南のスポーツ・体育教育を考える時期に来ているんじゃないでしょうか。

坂井：実は「正課外教育検討委員会」を立ち上げる計画を立てているのですが、非常に遅れております。日々の業務に

忙殺されたり、いろんな事件や事故への対応に時間を割かれたりで、なかなか前に進んでいませんが、構想としては、課外活動やボランティアなど、正課以外のものを西南の中にきちんと位置付けようと思っています。その中でいろんな議論が出てくるでしょう。まずはそれが、私どもの大きな宿題だととらえています。

桐明：それは素晴らしいことですね。

武井：それは、どちらかという、クラブ活動についての話だろうと思います。指導者に対する手当ての問題とか。それとは別に、正課の中に体育を位置付けることです。大学としての科学的なスポーツの授業をきちんと開講していく。そこには実践も伴うという、正課としての位置付けも入れていかなければならないと思います。そうしないと、一般の学生は田尻グリーンフィールドを使う機会もさることながら、積極的な使用理由がないわけです。

山崎：私の定年退職が近いころの教授会で、後任にはどのような人事が望ましいかという議論がありましたので、「ただ勝った負けたではなく、スポーツ科学が必要です。これから採用する場合は、運動生理学やスポーツ医学などを専門とする先生をお願いします」と申し上げました。

◇西南におけるスポーツの未来

司会：スポーツクラブに参加した学生には、卒業した後、ボランティアとして積極的に地域スポーツ振興にかかわっている人が非常に多くいます。地域社



会ではスポーツ指導者の活躍が期待されていますので、学生時代にスポーツをやるだけではなく、生涯にわたって地域に貢献するのは素晴らしいことだと思います。

それでは最後に、既に出ている田尻グリーンフィールドの利用方法も含め、西南における未来のスポーツと体育教育に関する皆さんの期待、夢、希望を一言ずつお願いしたいと思います。中馬先生からお願いします。

中馬：先生方のコメントを伺い、大変好意的にスポーツを解釈していただいていると思いました。これは先生方自らがかつてスポーツマンであり、スポーツの本質に触れ、フェアプレイの精神を培い、プレイすることの意義と価値を認めてこられたことによるものと拝察いたします。例えば、エール大学のスポーツ顧問であったウォルター・キャンプ⁸の「大学スポーツは学生そのものが確立したのであって、大学教員はただ単に邪魔をしただけにすぎなかった。大学教員集団による過度の干渉が、大学スポーツにブレーキをかけている」というコメントもあります。

8 ウォルター・キャンプ (Walter Camp, 1859-1925)：アメリカンフットボールのコーチ、スポーツライター。「アメリカンフットボールの父」と呼ばれる。

そういう意味では、私があまり強いことを言うべきではないのですが、これまで適者生存、優勝劣敗といったダーウィンの進化論によって優れた肉体的能力が誇示され、スポーツマンに対するある一種の虚像をつくってきたのかもしれない。先ほどから先生方がおっしゃっているように、この西南学院大学というキリスト教を基盤とした大学が、今後どのような学生を輩出していこうとしているのかと考えた場合、やはり敬虔なりべラルアーツを育成するべく全人格的教育の一環として、大学スポーツを活用する方向性を見出すべきだと思います。具体的には非常に難しいことではありますが、さっき坂井さんがおっしゃった「正課外教育検討委員会」、あるいは武井先生がおっしゃったスポーツ科学に立脚した正課授業展開は、大変良いお考えだと思います。最終的な目的はより良き市民を育成することですから、共生社会の一員としての姿勢を育むという理念に基づいて、大学スポーツを提供できるようにすることを真剣に考えれば、後の実務的なこと、具体的なことはスムーズに進んでいくと思います。ですから、大学の上層部、スポーツ科学を専門とする方、社会学や経済学、法学、国際文化学など学際領域を広げ、先生とこれを支援している事務職員の方々に集まっていただき、大学スポーツを通じてキリスト教主義をベースにした西南らしさを培っていく方向性を見つけていただきたいと考えています。やはり民主主義のセンスを育てるもの、スポーツから得られる良きものを教職員と学生が認識できる場を提供することが大事ではないでしょうか。本日は非常に有意義な時間を過ごさせていた

きました。ありがとうございました。最後に田尻グリーンフィールドには、大きなシンボルツリーも用意して、木陰をたくさんつくってくださるようお願いしておきたいと思います。

桐明：私は、約1万人の人口を有する室見校区で、いろんな活動をさせていたしていますが、施設が少ないため、老人クラブや子どものスポーツに苦慮しております。ですから、学外団体の使用状況の資料を見て、この地域の人たちはこんなに使用していて、素晴らしいなと思いました。西南学院の建学の精神はキリスト教に基づく教育ですから、以前あったという日曜日問題についても、単純に日曜うんぬんだけで片付けられない方がいいのではないかと、やはりキリスト教との関連は必要ではないかと思っています。「炎のランナー」という映画にもなりましたが、スコットランドの陸上の選手エリック・リデルは、オリンピックのパリ大会に出場しました。「私はクリスチャンだから」と言って、安息日の日曜日に行われる100メートルの種目を自分の信仰を貫いて棄権しました。貴族が「これは王の命令である」と言いましたが、彼は毅然として「私には王の前に神がいます」と答えたのです。その言葉が、いまだに引っ掛かっているんですね。

私は在学中、ギャロット先生に一番感銘を受けました。先生が亡くなるちょっと前に、私の身の上話を誇らしげにしました。「ただ、クリスチャンにはならずじまいです」と言うのと、それまで黙って聞いておられた先生が、ふっと顔を上げられて「人生にならずじまいはありません」とおっしゃいました。「ガーン」ときました(笑)。

すっかり打ちのめされたような気がしました。ですから、西南の教育とスポーツとの関連にもならずじまはないだろうと、あえて付言したいと思います。

坂井：この座談会に参加する前に、少年野球教室の様子を見てきました。とても明るく元気で、目をきらきら輝かせた、礼儀正しい子どもたちを見て、自分までうれしくなりました。大学が何十億という資金を投下して造った施設ですし、使っていただかないと宝の持ち腐れになってしまいますので、地域の方々にも喜んで利用していただけるようにしたいですね。もちろん利用者の中心が西南学院大学の学生であることには間違いありませんが…。先ほど中馬先生もおっしゃったように、大事なのは大学の中でのスポーツも含めた位置付けであり、その中の一つの器が田尻グリーンフィールドですので、私も頑張っていこうと思っています。

和佐野：一つは、中学から高校への課外のつながりですね。今は体育の授業についても、中・高教員の交流や入れ替えもやっており、カリキュラムもつないでいます。また、高校の課外スポーツを盛んにするために、推薦入学制度も確立しました。私が校長になる前からですから、もう5年を超えており、その辺もある程度充実し、成果も挙がっています。

すべてのスポーツ分野ではなかなかできませんが、ある一部分では小・中・高とつないでいけるのではないかと思います。早くから一貫した教育でつないでいけば、外部から選手を引っ張ってこなくても、それなりに戦え、楽しめるチームができるのではないのでしょうか。まだ具体的には考えていませんが、田尻グリーンフィールドとい

う良い設備もありますので、ぜひ利用させてほしいですね。

山崎：教育やスポーツについては、皆さん方がだいたい言い尽くされたと思います。

コミュニティと結び付かなければ、田尻グリーンフィールドの発展がないのは当然のことですが、どうすれば学生全員がグラウンドを利用するか、見学に来るかを考えていただきたいと思うのです。ここを会場にしてマラソン大会を開くとか、運動会を開くとか、いろいろな方法があると思います。

2点目は、身体障害者にも利用してもらいたいので、どうすればいいかということです。例えば車いす競技とか、パラリンピックの種目がいろいろありますね。そうした障害者スポーツの練習場所として、グラウンドや体育館を提供できないだろうかと思っています。

3点目に、なぜコンクリートばかり張られているのかなと思います。西新のキャンパスに点在している聖書植物園がある程度まとめて、田尻グリーンフィールドに造っていただければ、環境のためにもいいのではないのでしょうか。それを見ることによって、西南が管理・運営しているグラウンドであることも分かると思います。レバノンスギの種を記念に植えていただければ、一つのシンボルにもなるのではないのでしょうか。

武井：中馬先生がおっしゃったことに尽きるだろうと思います。正課教育としての体育と正課外教育としてのクラブ活動をかみ合わせていけるようなコンセプトを持ち、衆知を集めた形で打ち出していく、その役割の一端でも担えればと思っています。このグラウンドの環境保全については、非常に嚴格に

との条件があります。その結果として、野球場の向こう側にビオトープを造りましたし、そこを中心に環境教育ができる施設にしていくつもりです。今おっしゃったような植物園が環境的にふさわしいのであれば、市当局の協力も得て、環境面でも西南らしいものにしていきたいと思っています。

司会：ありがとうございます。皆さんのおかげで、大変有意義な座談会となりました。皆さんの貴重なご発言に心から感謝を申し上げます。

この座談会に参加させていただくことで、皆さんの西南学院におけるスポーツおよび体育教育・研究に懸ける熱き思いと貴重なご貢献を知ることが

でき、大変うれしく、感謝しております。また、個人的にも大きな励ましをいただきました。皆さんの熱き思いと貴重なご貢献が蓄積され、生かされて、西南学院がスポーツおよび体育の盛んな学院として大きく発展し、いつの日か皆さんの夢、希望が実現することを願ってやみません。あらためて長時間にわたるご協力に心より感謝を申し上げます。

◆この座談会は、2009（平成21）年10月31日、田尻グリーンフィールド・全面オープンセレモニーの後、同会場内クラブハウスで実施されました。